個室とテレコミュニケーション(2)

—住宅を中心とした空間認識—

文　屋　　敬

A private room and telecommunication part 2

Kei J. Bunya

キーワード：社会化、ウチ、ソト

1．問題設定

前稿[1]で先行研究をもとに、戦後復興期に発表された公団の集合住宅の標準設計である公営51C型が、日本における個室誕生、より厳密には個室普及の原点であることを確認した。ただここでいう個室誕生にはいくつかの条件がついている。一つは対象が一般庶民であること、一つはハードウェアとしての個室ではなく機能面（ソフトウェア）としての個室であるということ、そして何よりも建物自体よりも公営51C型設計を支える理論が個室誕生の萌芽とみなされることである。第1点目について、個室自体は公営51C型が発表される前、明治期、大正期の一部の建築物に採用されていた。しかしこうした個室は特定の階級の住宅には見られるが、一般庶民の住宅にはほとんど見られなかった。第2点目について、公営51C型はそれまでの住宅と比較すれば、壁に区切られた個室化が見られるが、独立性や機密性は低い[2]。公営51C型集合住宅で生活する人々は、特定の部屋を特定の家族構成員（初期の多くは子ども）のための部屋として、すなわち機能的に個室として利用した。最後に第3点目について、公営51C型は、「食寝分離」と「就寝分離」の理論に基づいて設計された。この理論によって個人のための寝室という部屋の利用方法が知られるようになる。公営51C型集合住宅登場後、高度経済成長期のリビングルームの普及、世帯構成員数の減少によってソフトウェアとしての個室としてだけではなく、ハードウェアとしての個室が普及することになる。

一般的に個室普及の要因としてあげられるのは、プライバシー意識の芽生え（個人の人権の尊重）や子どもの教育である。確かにこの2つの要因は個室の普及に大きな影響力をもっているだろう。プライバシー意識および子どもの教育という二つの要因は個室という空間にどのような意味を与えるかという空間認識に依拠して成立するものであり、個室の普及という問題を考察する場合には、我々がどのような空間認識を共有しているのか、ということを議論する必要がある。そこで本稿では住宅を中心とした空間認識について議論し、その空間認識が個室の普及にどのように結びついていったのかを明らかにしたいと思う。

2．物理的空間の分離と帰属意識

「外で遊ぶ」「うちの中で遊ぶ」と表現されることがあるように、住宅は壁と屋根によって内側と外側とを明確に分離する。つまり物理的な空間認識としては「ソトとウチ」とに大きく2分される。「ソトとウチ」は物理的に空間を区別する概念であるが、同時にこの概念は集団への帰属意識を表す概念としても用いられている[3]。

中根千枝は、日本の住宅の構造とイギリス、インド・イタリアの住宅構造とを比較し、日本人の社会学的性向の原型を明らかにした（中根、1972：94－136）。中根は「ウチーソト論理」によって、日本人が自己を取り巻く集団を同心円的に4つのカテゴリーに分化していると分析する（図1）[4]。家族と仕事仲間としての第1カテゴリー

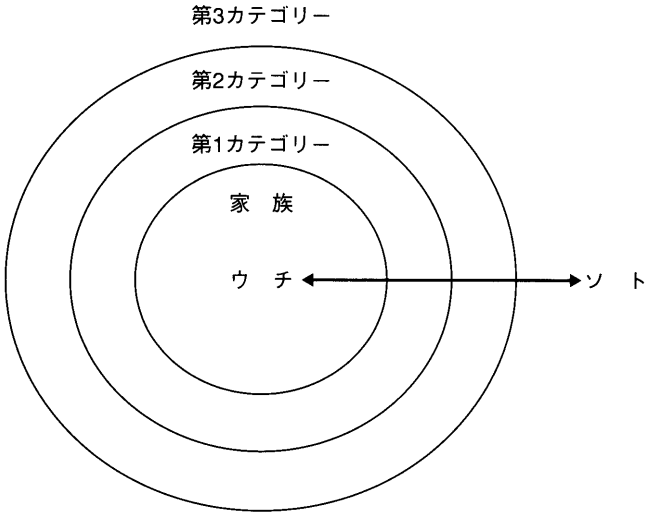

図1　中根モデル

に属する集団は、個人の社会生活の核を形成し、ウチに対しての凝集性が高く、ソトに対しての排他性が高い。第2のカテゴリーは知人を中心とした人間関係のネットワークを形成し、個人の社会生活の大部分は家族、第1カテゴリー、第2カテゴリーの三つの場において営まれる。最後の第4カテゴリーは3つのカテゴリーに所属しない集団であり、他人（よその人）である。中根は家族を社会的認識のカテゴリーから除外しているが、基本的には第1カテゴリーと重複していると捉えることができる。

こうした中根の個人の帰属意識に関するカテゴリーは「タテ社会」理論の研究（中根、1967）から導き出されてきた結果であるが、米山は中根の理論を批判的に継承し（米山、1976）、個人の社会的認識として「身内」「仲間」「世間」「同胞」という4つのカテゴリーに分けた（図2）。米山は縦軸に血縁意識、横軸に集団の限定性と質的規模を想定し、4つのカテゴリーを構成している。しかし「私たちの社会関係のいちばん外枠を世間と呼び、家族のように血縁的関係で結ばれている部分を身内と呼ぶならば、仲間というのは、いわばその中間に位置している」（米山、1976：37）という本文中の発言から、米山がカテゴリーの構成を中根と同様に同心円的に捉えており、「同胞」というカテゴリーはこの同心円的なカテゴリーに含まれず、状況によって相対的に利用される概念である（米山、1976：36）。したがって米山のカテゴリーは図3のように表すことができる。

このように中根も米山も日本人の社会的認識（集団への帰属意識）を「ウチ－ソト論理」による3重構造として捉えていると考えることができる。しかし同じ3重構造と捉えているが、各カテゴリーの位置づけ、特に仲間カテゴリーの位置づけが一致しない。米山が仲間カテゴリーを「身内」の外側に位置づけているのに対し、中根は仲間カテゴリーを家族と重複させる。中根は「本論で問題としたいと思うのは、家族生活における人間関係、すなわち、ウチ（住居）の中での家族成員の動き方と、それに密接に関係している部屋の配置ならびにソトとの関係である」（中根、1972：95）と述べ、日本の住宅構造と家族成員の動きを分析し、その後、三つのカテゴリーについて説明する。そして第1カテゴリーの説明の中で「したがって、その集団はきわめて機能が高く、ソトに向かって排他性をもち、ちょうど前節で考察した“ウチ”の集団的特色をよく備えている。事実、人々はこの自己にとって第一義的な所属集団を“ウチ”とよんでいる」（中根、1972：111）と結論付け、家族（ウチ）と第1カテゴリーを同義に扱っているのである。しかし「ソトとウチ」が本来、物理的な空間認識を表す概念であるとすれば、中根自身が住宅の壁の存在を重視しているように、住宅内で生活していない仲間を家族と同様に扱うことに無理があると考えられる。むしろ米山のように家族と仲間を区別すべきである。また、中根の第2カテゴリーに含まれる「知人」は第1カテゴリーにも第3カテゴリーにも含まれる可能性がある。米山が扱うように第1カテゴリーのストックとして第1カテゴリーに含むべきだろうと考える。

本稿では日本人の集団への帰属意識を、米山モデルを援用し、住宅内で生活する「家族」、「仲間」、仲間でも知人でもない他者から構成される「ソト社会」という三つのカテゴリーに分化したい。

世間	同胞
仲間	身内

図2　米山のカテゴリー（米山、1976：38）

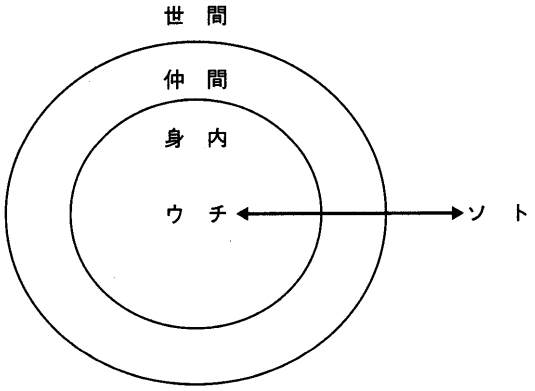

図3　米山モデル

3．帰属意識と空間認識

前節で述べた「家族」「仲間」「ソト社会」という3重構造は、個人の住宅を中心とした空間認識と一致する。すなわち「家族」は住宅の「ウチ」であり、「ソト社会」は住宅の「ソト」である。仲間は「ソトのウチ的空間」と呼べるような空間にあたる。明治以前の日本の大部分の地域では、20、30軒の住宅（家）があつまって集落を形成し、組織化された共同体が構成されていた。これを村落共同体と捉えることができる。村落共同体は個人ではなく家族（家）単位に構成され、村落で行われる様々な事業は村落単位で行われた。農村を例にあげれば、家の田に対する田植え、虫取り、収穫などの農作業は家単位で行われるが、作業を行う時期は村落単位で行わなければならない。「一人だけが勝手に虫取りや新しい場所に水を引くなどということをすると、他との協調性が崩れ、結果的に全体の生産性が低下する。同じ時期に同じことを一緒にやることによって、はじめてその地域の生産力が上がる」（奥野、2000：21）からである。共同体の共有地の整備、祭りなどの諸行事は村落単位で行われる。

村落には道祖神（塞神）、大きな樹木、石碑などによっ

て境界が設けられ、村落の領域が定まっているのが一般的である（鳥越、1985：93－101）。この境界によって村落の内側と外側とが区別される。このように住宅という「ウチ」、村落という「ソトのウチ的空間」、村落の外側という「ソト」という３重構造の空間認識が形成されている（図４）。すでに述べたように、空間認識の３重構造は、個人の帰属意識の構造と一致する。帰属意識と空間認識のどちらが原因でどちらが結果であるかを証明することはできないが、帰属意識によって住宅が建てられるということは考えにくいため、どちらかといえば空間認識が帰属意識に先行していると考えたい。厳密には住宅で寝食を共にする単位としての家族という意識がある程度明確になっている段階で住居が建設されるようになり、壁によって区切られた住宅で生活するようになってから、空間認識が形成され、帰属意識が明確になったのであろう。

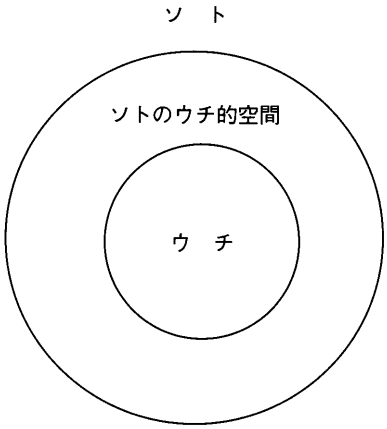

図４　村落の空間認識

４.「第二の社会」の登場

３重構造の空間認識は、ミーム（文化遺伝子）[5]として増殖し、人々の生活や意識に定着した。しかし産業構造の変動、人口の都市集中化という社会変動によって空間の意味づけに変化が生じることになる。奥野卓司は次のように述べている。

> 逆にいえば、今ビジネスになっているものは、もともとはみな家庭の中にあったものだ。この過程で、それ以前には複数の家庭群の集合体であった社会（ムラ、共同体）は、各家庭と分離して、企業の集合体（会社＝社会）となった。言いかえれば、「第一の社会」としての家庭から切り離された産業・企業が「第二の社会」として成立したのである。同時に家庭はかつての生産機能を失い、家庭＝消費の場、産業＝生産の場という二極化した構造が成立した。
>
> こうして家庭と社会（会社）という二つの場が生まれ、成人男性（および結婚して家庭に入るまでの未婚女性）が毎日、この二つの場の間をほぼ直線的に往復しはじめるようになり、「家庭にいるヒト」（女性、高齢者、子供）と「社会にいるヒト」（成人男性）とが分離されることになった。またそれによって、近代家庭には、そこに専従する専業主婦という「職業」が生まれた。
>
> （奥野、2000：32－33）

産業の中心がいわゆる第一次産業から第二次・第三次産業へと移行し、職を求めて多くの人口が都市に移動した。流動した人々は、移動前の村落共同体との結びつきを弱め、村落共同体に代わる組織が住宅周辺にないため[6]、住宅がソトに単独で存在することになる。そして同心円的なウチ－ソトのウチ的空間－ソトという空間認識と家族－仲間－ソト社会という帰属意識との間にずれが生じる。奥野のいう第二の社会が登場する以前は、空間認識と帰属意識とが家族単位で一致していた。村落では子どものしつけ教育は共同体内部の同年齢集団および共同体全体で行われ（広田、1999：25－42）、家族の中で働ける人は男女の区別なく、すなわち夫も妻も共同体で働いた。第二の社会登場後、家族単位で構成されていた共同体が崩壊する。こうしてソトのウチ的空間がウチの外側からはずれ、それぞれが単独でソト空間に存在することになる（図５）。

こうして同心円的なウチ－ソトのウチ的空間－ソトという空間認識は構造的に成立しなくなるのだが、同時に空間認識にとって重要な二つの変化が生じている。一つは空間認識の単位が家族から個人に変化したこと、もう一つは個室の誕生である。

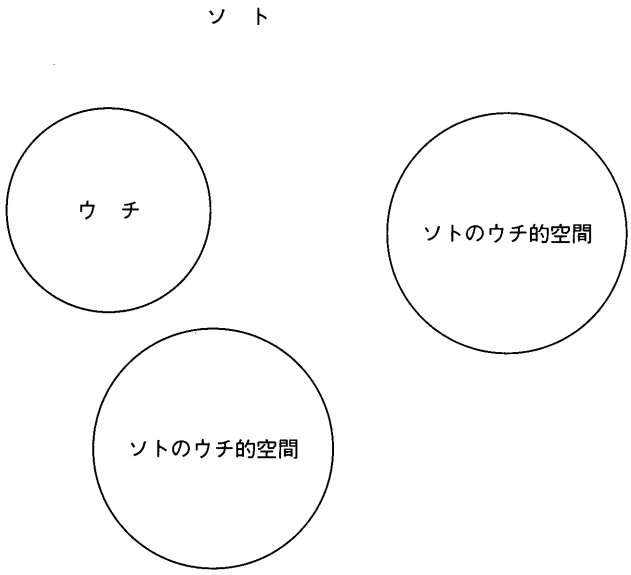

図５

５．個室の意義

ウチ－ソトのウチ空間－ソトという空間認識は「個人」よりも「家族」を基本的な単位として構成されてい

る。家族を基本単位としているが、個人としての空間認識もこれに一致していると考えてよい。多くの場合、日本では生活の多くの場面で、個人よりも家族という単位で扱われることが多かったからである。現在でも経済単位としては「世帯」という家族単位で扱われる。しかし第二の世界登場以降、生産活動の最小単位は、換言すれば労働単位は個人（奥野にしたがえば、成人男性や未婚女性）になり、住宅を中心とした活動も個人単位で営まれるようになる。その結果、住宅というウチ空間に個人が浮かび上がることになった（図6）。個人はすでに3重構造の空間認識の枠組みを習得している。個人を基本単位としてみたとき、これまでのような住宅構造では「ウチ－ソト」という2重構造になり、3重構造の空間認識の枠組みを維持することはできない。この時期にタイミングよく、「個室」と「個室を生み出す理論」が提示されたのである。個室は、日本で長期間維持されてきた3重構造の空間認識の枠組みを維持するために、きわめて都合のよい構造をもっている。こうしてウチ空間の中にさらなるウチを構成され、個人として個室（ウチのウチ的空間）－ウチ－ソトという3重構造の空間認識が維持されたのである（図7）。

ここで問題となるのは、ウチ空間である。家族を単位とした空間認識では、ウチが核をなしていた。しかし核の内側にウチのウチ的な空間である個室が構成され、ウチは核ではなくなった。高度経済成長期に住宅供給者および建築学関係者がウチの空間的意味づけを明確化する理論を提示する。「公私分離」理論である。個室がない住宅では、原則的にすべての空間を家族が共有し、自由に利用することができる[7]。こうした住宅では、公私を区別する空間を設定する必要がない[8]。特定の家族構成員のための個室がある住宅では、個室を私的空間、その他共有スペースを公的空間と意味づけ、家族構成員が交流する場として、リビングが導入された。いわばリビングはウチのソト的空間となる。

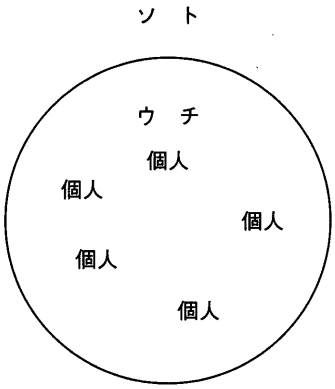

図6

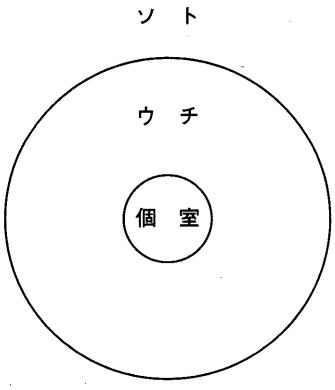

図7

ウチと認識されるか、ウチのソト的空間と認識されるかは、空間の意味づけという側面から見て、大きな相違がある。また従来空間認識と帰属意識とは一致しており、空間の意味づけと空間に存在する人間の意味づけは対応する。したがってウチ空間の意味づけの相違は、家族間の人間関係形成に影響を与えると考えられる。同時に私的空間としての個室の意味づけも重要である。リビングルームが導入されたnLDK住宅は以後、住宅設計の基本として一般化する。ここで問題なのは、nが家族の人数マイナス1ということである。これは夫婦を1とカウントしているのだが、もし公私分離理論が私的空間を尊重したうえで公的空間をコミュニティ空間として有効利用させるということであれば、夫婦を別個人として扱い、私的空間である個室の意味づけを明確化すべきではなかっただろうか（上野、2002）[9]。

6．ウチのソト的空間

「ウチ」と「ソトのウチ的空間」、「ウチ」と「ソト」は壁によって物理的に区別される。「ソトのウチ的空間」と「ソト」とは物理的な境界が存在せず、二つの空間的な相違は、認識上の区別にすぎない。「ウチ」と「個室」とは、壁によって物理的に区別される。これは、「ウチ」と「ソトのウチ的空間」および「ウチ」と「ソト」との相違と等しい。すなわち「ウチのソト的空間」は「ソトのウチ的空間」および「ソト」と同じような空間として認識される可能性がある。

それでは「ソトのウチ的空間」とはどのような空間として認識されるようになるのだろうか。この問題は直接考察するよりも、類比的に考察した方が理解しやすいと考える。ここでは「舞台」での演技について考察を加えながら、「ソトのウチ的空間」について考察したい。

演劇の舞台は「観客席」「舞台」「楽屋（舞台裏）」と大きく3つの空間から成立している。観客は「観客席」から「舞台」を観るのだが、当然、「観客席」と「舞台」には壁や間仕切りがない。舞台上に住宅が設定されている場合、演技者は観客席側に壁があると想定して演技し、実際には壁は取りのけられて[10]、観客は住宅内を観ることができる。舞台は観客席から見やすいように少し高めに設置されているため、舞台と観客席とは物理的に区別

されるが、実際には物理的な区別ではなく認識的に区別される。そして舞台では演技者だけが演技をし、芝居は舞台の上で閉じている。観客はそこに存在しないと想定され、壁のない住宅で行われる行為は、住宅の中にいる演技者にしか見られていないものとして行われる。もちろん舞台で行われる芝居は観客にみせるものであり、観客のための演出が行われているのだが、芝居自体としては演技者たちの中に閉じたストーリーとして展開され、観客に舞台から語りかけることは、反対に観客が演技者に応対するということは原則的にない。しかしながら芝居が観客に見せることを前提としている以上、舞台での失敗は許されず、万一失敗した場合は、演技者としての評価、あるいは演技者生命自体に影響する。

舞台と観客席との関係はソトのウチ的空間とソトの関係と類比的にとらえることができる。ソトのウチ的空間で行われる行為は、ソトに開かれている。たとえ仲間集団同士で行為しあっていたとしても、それは仲間集団の中で閉じているのではなく、その行為はすべてソトの人間に見られる。したがってソトのウチ的空間では原則的に大きな失敗は許されない。たとえば電車の中において仲間同士で騒いでいることが、これは社会問題として取り上げられることがあるが、ソトのウチ的空間で行われる行為がソトの人間に見られているということを示している。

楽屋（舞台裏）は壁や区切り板などで観客席から見えないように隠されている。楽屋で演技者は舞台衣装に着替えたり、食事をしたりといった日常的な行為を行い、さらに本読みやあわせ稽古などが行われる。楽屋で行われる芝居稽古は観客に評価されることはなく、外部に対して閉じている。ここではある程度の失敗が許される。むしろ失敗をなくしより完成度の高い演技をするために稽古する。また舞台で演技する役割と異なった行為をすることも許される。楽屋では演技者の日常と舞台での役割とが混在している。そしてこの曖昧さが許容される。

ウチは楽屋と類比できる。ソトやソトのウチ的空間とは異なった行為が許された、閉じた空間である。ウチでは、ソトやソトのウチ的空間で行うべき適切な行動の習得、すなわち社会化が行われる。したがってウチではソトでは社会的に許されない行動が許容され、ウチに属する人間にだけ許される行動とソトで行われる行動とが混在している。社会化される者も社会化の担い手も相互に試行錯誤を繰り返しながら社会化というプロセスを経験することができる。

さて江戸時代に誕生した歌舞伎劇場の楽屋は、初期は大部屋一つであった構造が、舞台関係者ごとの部屋、役者の役柄（序列）にあわせた部屋が作られ、複雑化していく。序列上位にあたる役者には個室があてられ、下位の役者とは一線を画する。こうした個室にいる役者にとって個室以外の個室は、下位の役者とは異なった空間認識をもっている。こうした役者にとって楽屋は舞台とは異なるが、それに準じた空間として認識される。すなわち楽屋であっても演技に失敗は許されず、個室役者としてふさわしい演技や行動が期待される。楽屋での失敗は舞台での失敗ほど大きな打撃にならないだろうが、役者としての資質が問われることになるだろう。特に個室に入れない下位の役者は個室役者に対して特別なイメージを抱いており、楽屋での一挙手一投足に注目している。個室役者が楽屋で失敗すれば、下位の役者に対するイメージダウンにつながる。個室役者は自分にあてられた個室以外の場所では、日常での行為を行うことができない。

「ウチのソト的空間」は個室役者の楽屋の空間認識と類比的である。特に第一次社会化の時期に当たる子どもの場合、自分の個室空間というものが確保され、個室空間での生活時間が長くなるにつれて、「ウチのソト的空間」が「ソトのウチ的空間」と同質化する可能性がある（図８）。そして個室役者が楽屋では個室役者としての演技を行い、失敗が許されないように、「ウチのソト的空間」では「ソトのウチ的空間」と同様に失敗が許容されなくなる。これは当初、個室が子ども部屋として利用されたことと関係している。

最大の問題は、「ソトのウチ的空間」においてどのような社会化が行われているのか、およびそこで要求される行為が何かということである。これについては具体的な資料やデータと照らし合わせて検討する必要があるだろう。

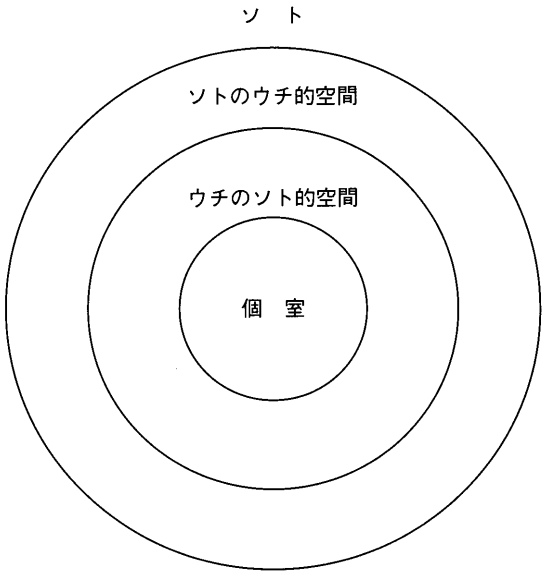

図８

７．まとめ

個室の誕生と普及を住宅購入者（あるいは住宅居住者）の視点から見ると、ミームとしての「３重構造の空間認識の枠組み」の維持と関連していることが明らかになったと思う。「プライバシーの尊重」や「子どもの教

育のため」という理由は、住宅供給者（行政）や住宅設計者、建築関係者の啓蒙的な主張である。住宅購入者にとってはこれまでの枠組みを維持しやすい構造の住宅を入手したのであり、その結果、空間認識の変化、さらに行動様式の変化が生じた。もちろんプライバシーの尊重という主張の前提となる個人が表出化したということは事実であろうが、これは意図的に表出されたのではなく、家族を最小単位とする共同体の崩壊とソトのウチ的空間が物理的に離れてしまった結果である。

空間認識の変化はこれまで比較的安定的であったウチ空間に大きな影響を与えることになり、その結果、ウチ空間における人間関係が変化することになる。この際、奥野の指摘する家族機能の外在化の影響は見過ごすことができない。これを前述の個人の表出と併せて考察すれば、個人に要求され、期待される行動様式、すなわち社会化の内容が大きく変化することを意味する。これについては別の機会に議論したい。

注

1　文屋　敬、2002、「個室とテレコミュニケーション(1)－仮説設定－」『福岡女学院大学紀要　人間関係学部編　第3号』福岡女学院大学

2　特に台所と隣り合った部屋は個室としての機密性がほとんど確保されていない。

3　空間認識、帰属意識だけでなく、言語学の領域では、ウチとソトで言語の使用法が区別されることに注目し、「ウチーソト理論」が言語分析に用いられている。しかし後に触れるように日本では「ウチーソト」という2分法よりも、「ウチーソトのウチーソト」という3文法で分析すべきである。

4　第3カテゴリーは無限の広がりをもっており、外枠がない。以降すべてのモデルで「ソト」に関しては外枠を描いていない。このモデルは中根千枝（1972）を参考に筆者が作成した。

5　ここではミームについて詳細の議論をしていない。次に発表する論文で詳しく議論することにしたい。

6　村落共同体に代わる組織として自治体が形成された。しかし流動者の多くが当初単身者であったこと、生産活動と合致した共同体ではないこと、職場が住居から離れていたことから考察すれば、住宅がソトに単独で存在するというイメージに近いのではないだろうか。

7　家長夫婦だけが利用できる部屋が存在する場合があったが、一般の庶民住宅ではこうした特別な部屋を確保することは多くなかったようである。

8　近隣者や知人など家族以外の訪問者が来宅する住宅では、家族だけが利用できる空間と訪問者が利用できる空間を分離する場合があった。住宅規模が大きくない住宅では、訪問者との応対は土間で行われた。

9　この主張は上野千鶴子が多くの著作、講演で主張する内容である。ただ上野の主張は地域的な偏りがあるような気がする。首都圏や一部の階層の人間には受け入れられるかもしれないが、一般化するにはもう少し時間がかかるだろう。しかし個室空間の意味づけが明確でなかったという主張は上野の主張ではない。
個室の意味づけを建築物として明確化したのは、黒沢隆の『個室群住居』である。

10　一部の芝居では壁があるという「お約束」をやぶり、実際に壁がないかのような演技を行う場合がある。これは空間認識としてみると、非常に興味深い。舞台と観客席の区別も認識的に行われるだけであり、実際に舞台から観客席に降りることができる。逆に観客席から観客が舞台に上がることもできる。

参考文献

上野千鶴子、2002、『家族を容れるハコ　家族を超えるハコ』、平凡社
奥野卓司、2000、『第三の社会　ビジネス・家族・社会が変わる』（叢書インターネット）、岩波書店
鳥越皓之、1985、『家と村の社会学』、世界思想社
中根千枝、1967、『タテ社会の人間関係　単一社会の理論』、講談社
中根千枝、1972、『適応の条件　日本的連続の思考』、講談社
広田照幸、1999、『日本人のしつけは衰退したか　「教育する家族」のゆくえ』、講談社
米山俊直、1976、『日本人の仲間意識』、講談社
『世界大百科事典』日立デジタル平凡社